

伊那市の南の玄関口 西春近へようこそ

《伊那市西春近》

江戸時代の西春近は高遠領春近郷に属し、小出・沢渡・表木・赤木・諏訪形・下牧の6か村に分かれていました。この6か村が明治8年に合併して西春近村が誕生。それから90年後の昭和40年に伊那市と合併して今日に至ります。

区内を古くは春日街道、伊那街道、三州街道が、今日では国道153号線、中央道、JR飯田線が通過する交通の要衝（ようしょう）であり、伊那市の南の玄関口として発展してきました。



広域農道から仙丈ヶ岳方面を望む

1 常輪寺と犬房丸（いぬぼうまる）の墓

転法山常輪寺(曹洞宗)は、犬房丸が東方（ひがしがた）集落にあった真言宗の古寺・大通院を再建して大通山常輪寺と名付け、華嚴釈迦牟尼仏（けごんしゃかむにぶつ）を安置して自ら開基となったのが始まりとされます。西暦1200年ごろのことです。

境内には犬房丸の墓があり、毎年7月26日には関係者が参加して供養が行われてきました。ちなみに犬房丸の戒名（かいみょう）は大通院殿覚翁常輪大居士（だいつういんでんかくおうだいこじ）です。熱病に悩まされた里人が犬房丸の墓に祈願したところ不思議に治ったという言い伝えも残ります。



《犬房丸伝説》

犬房丸は“日本三大仇討”の一つに数えられる「曾我物語（そがものがたり）」に登場します。

曾我十郎・五郎兄弟に討たれた工藤祐経（くどうすけつね）の子の犬房丸は、父を殺された悔しさのあまり、捕縛（ほぼく）された五郎を扇子でたたいてしまいます。

将軍頼朝はこれを「武士にあるまじき行い」ととがめ、伊那へ流刑（るけい）にしました。父の所領の伊豆七島と同じ伊那の七島（狐島・大島・牧島・青島・福島・殿島・小出島）を与えたといわれます。犬房丸は初め狐島に居を構えましたが、度重なる三峰川の氾濫に悩まされ、高台にある小出の東方へ移り住みました。伊那での犬房丸は、三峰川の氾濫に悩む農民を見て「私が力にならなければ……」と決意し、災害復旧や新田開発、水路工事など農業の振興に尽力しました。住民の犬房丸への信頼は日に日に高まったといえます。

《小出諏訪神社》

常輪寺から中央道を越えた山側にあり、創建年代は不明です。明治42年に小出村の村社（そんじゃ）に指定され、小出全域の無格社35社が合祀（ごうし）されました。諏訪社本殿は諏訪の名工・立川和四郎富昌の作であり、本殿左の八幡社も立川流といわれています。

《小出城址》

常輪寺から見て南東方向に見える林が市指定史跡の小出城址です。鎌倉時代に小出の地を治めた工藤氏の居城といわれています。居城といっても敵が攻めてきたときに立てこもる砦（とりで）です。今でも空堀（からぼり）によって区画された主郭（かく）を見ることができます。その南側は戸沢川に面した急斜面になっていて、容易に敵を寄せ付けない自然の要害です。

《五郎姫宮（ごろうひめみや）》

常輪寺の東方の木立が五郎姫宮です。主神は姫大神（神功皇后じんぐうこうごう）。曾我五郎の恋人・虎御前（とらごぜん）を祀った「姫宮」、小出氏がここに祈願したところ待望の若君を授かり五郎丸と名付けたことから「五郎宮」などの別名もあります。



2 伊那スキーリゾート

昭和63年、中央アルプス権現山の麓に開設されました。降雪量は少ないものの気温が低いという利点を生かした、スノーマシンによる人工雪のゲレンデです。天候に左右されないため、地元ばかりでなく中京圏からも学校のスキー教室や家族連れなど主に初心者利用が多いようです。

このセンターハウスは標高約880mにあり、南アルプスを背景に伊那市のほぼ全域を一望できる大パノラマが人気です。天竜川と三峰川によって形成された河岸段丘や活断層による段丘がグリーンベルトとなって市街地や水田地帯を縁取る様子は、伊那谷の特徴的ある景観となっています。伊那まつりの打ち上げ花火鑑賞にも絶好の場所で、伊那ケーブルテレビジョンは毎年、ここから実況中継しています。

《伊駒アルプスロード予定地》

令和2年度から県に代わって国が直轄権限代行として事業を進めており、下牧区及び表木区内の下段の宮田村境～天竜川渡河部において地元のみなさんの理解を得ながら測量などの現地調査を行っています。

また、ここでは、国道153号現道からの接続道路も併せて整備する計画となっています。



《桜の里》

スキー場へ上る坂の途中に細ヶ谷グラウンドがあります。その山側斜面を見ると、自治協議会が呼びかけて西春近の各区・学校・公民館・商工会・郵便局など各種団体が植えた桜の木が育っています。もう数年もすれば桜の花が一带を埋め尽くし、市民の目を楽しませてくれることでしょう。

《出征（しゅっせい）の大イチョウ》

グラウンドの下の桜並木に1本だけ、大きなイチョウの木がそびえています。もとは西春近村役場の玄関脇にあった「出征の大イチョウ」です。戦時中、出征する兵士はこの木の前で記念撮影し、沢渡駅から電車に乗って戦地へ向かったという思い出の木です。昭和52年、村役場を取り壊すことになったとき、すでに樹齢50年を超える大木でしたが、大切な記念樹としてこの地へ移植されました。



3 名廻東古墳（なめぐりひがしこふん）

犬田切川北岸には名廻西・東、鎮護塚（ちごづか）西・東、唐木の5基の古墳の存在が確認されています。このうち名廻東古墳は、昭和44年の林道拡幅工事の際に石室が露出して注目され、昭和47年には中央道建設に伴って本格的な発掘調査が実施されました。その結果、墳丘の直径11メートル、高さ2メートルの古墳時代終末期7世紀ごろの円墳であることがわかりました。長さ7メートルの横穴式石室内からは、剣や鏃（やじり）などの武具、金環や玉などの装身具、須恵器や土師器などの什器（じゅうき）類とともに、わずかながら人骨も見つかっています。古墳の規模と副葬品の豪華さから、被葬者（ひそうしゃ）はこの一帯を治めていた豪族と考えられています。

古墳の石室に用いられていた巨石は、富県の御殿場遺跡（ごてんばいせき）に一時保管されていましたが、平成2年に里帰りして現在の地に復元され、白沢古墳公園として市民に公開されています。



4 かんてんぱぱガーデン

赤松を主とする自然豊かな平地林を活かした環境の中に伊那食品工業本社・工場、美術館、レストラン、ショップが点在する「かんてんぱぱガーデン」。社員をはじめ地域の人々、訪れる人たちが安心して憩（いこ）える空間を……という願いのもとにつくられたガーデンは、社員が自主的に手入れを行っていて、新緑や紅葉、山野草など四季折々の風景を楽しむことができます。また、地下130メートルから汲み上げられた天然水を飲める水場もあり、この水を目当てに訪れる人も多いそうです。

ここは木裏原区北丘（きうらはらくきたおか）といい、東春近の飛び地です。江戸時代、山がない殿島村は高遠藩からこの地一帯に「入会地」を与えられ、刈り敷き・薪炭（しんたん）・建築用材などを運び出していました。現在の沢渡集落はもとは眼田村といって殿島村の枝村でしたが、江戸時代の終わりに独立が認められて沢渡村になったという歴史があります。



5 諏訪形の猪垣跡（ししがきあと）

江戸時代、西山山麓一帯にはイノシシによる農作物への被害を防ぐ目的で猪垣が設けられていました。当時の猪垣は、関係の村々が共同で費用や人足を出し合い、土手を築いてその上に木柵（もくさく）を立てたもので、古くは元禄（げんろく）以前に遡（さかのぼ）る可能性も指摘されています。諏訪形に残る古文書によれば、文化5年に行われた修理は諏訪形・下牧・赤木・宮田4か村共同の大がかりなもので、川に水門を設けるなど徹底した対策を講じました。被害の大きさと、農民の悩みの深刻さを物語っています。

「諏訪形の猪垣跡」はこの猪垣を復元したもので、市の指定文化財に指定されています。

